

子どもとテレビ

子どもたちがテレビ離れし始めたという。たしかに、一昔前と比べ、子どもたちの熱中する番組は少なくなったし、ブラウン管から子どもたちのヒーローが誕生する割合も減少してきている。とはいえ、ここ数年来、子どもたちのテレビ視聴時間が横ばいの状態が続けているのも、また事実である。つまり、子どもたちは、さめた目で、ブラウン管を見つめている。

考えてみれば当然かもしれない。「11PM」や「小川宏ショー」が、初めて登場したのは、昭和40年のことであるからその年に生まれた子どもは、今春高校へ進学した計算になる。また「オバケのQ太郎」(昭和40年)、「おそ松くん」(昭和41年)、「サインはV」、「アタックNo.1」(いずれも昭和44年)などのテレビマンガを見て育った世代も、大学や高校に進み始めている。そうした意味からすると、現代の子どもたちは、テレビがあるのを当たり前と思うテレビの申し子たちである。それだけに、テレビに慣れすぎている感じがしないでもない。

そこで、テレビに慣れ親しんだ子どもたちが、テレビに対して、どのような感情を抱いているのか。そうしたことを探りたいと、調査票を作成してみた。

奈良教育大学教授
深谷 昌志

東京学芸大学大学院
横井富美子

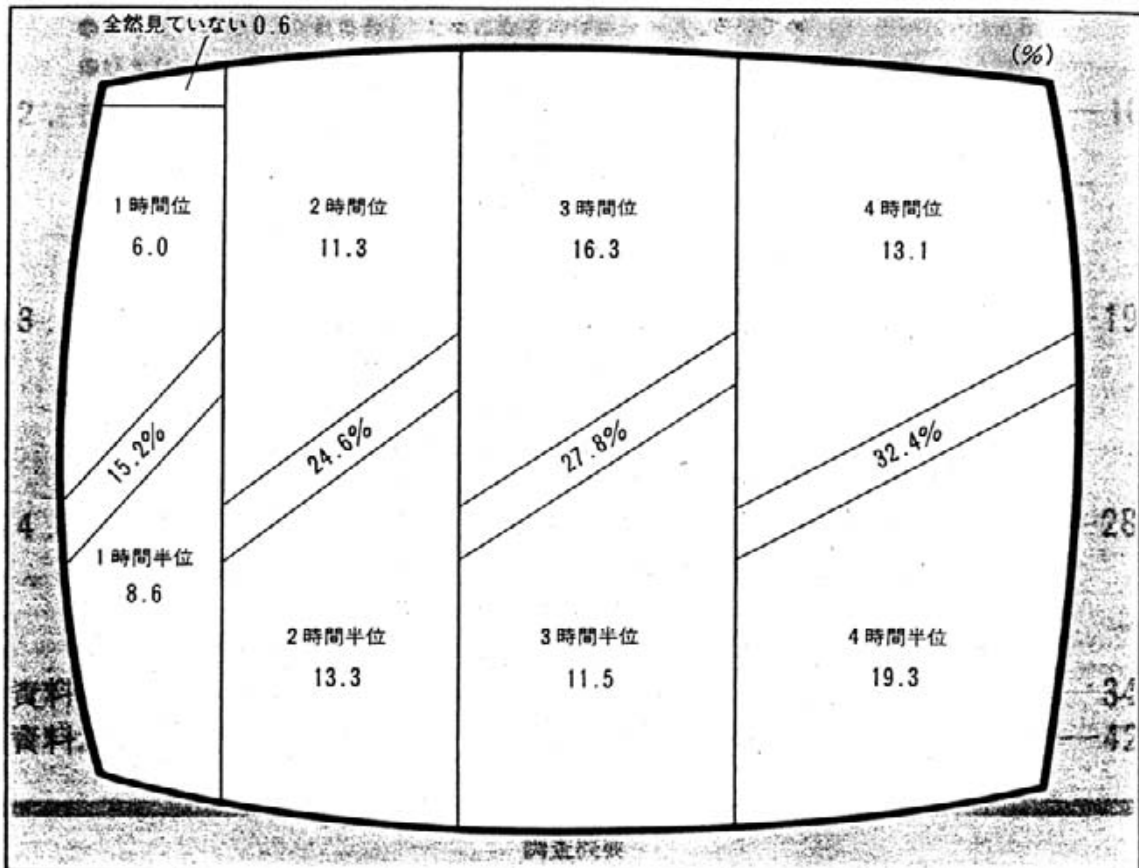
1. テレビとどうつき合っているか

調査の概要

調査は、vol.1-1「家庭学習」と同時に同一のサンプルに実施したので、調査に協力してくれたのは、2,049名（小学校4年男子391名、女子364名、5年男子284名、女子280名、6年男子375名、女子355名）であった。

4時間以上見ている子が32%

まず、子どもたちは毎日、どれ位の時間をテレビに費しているのだろうか。子どもたちの反応は以下の通りであった。



もちろん、この結果は、子どもたち自身が「これ位の長さ見ている」と自己申告したものであるから、数値そのものに、絶対的な信頼を置きにくいのは言うまでもない。しかし、それにしても、上の数値が示すように、毎日、テレビを「4時間以上」見ている子どもが

32%に達している反面、1時間半以内に、視聴時間をおさえている子が15%を占める。つまり、ひとくちにテレビ視聴といっても、個人差がきわめて大きい。

なお、念のために、学年別・性別に視聴時間の長さを要約すると、表1の通りとなる。小4から小5、小6と、学年が上がるにつれて勉強が大変になるので、テレビ視聴が短くなるのではないかと予想していた。しかし、少なくとも今回の結果では、そうした傾向が認められなかった。学年差よりも、個人差の方がテレビ視聴の長さに影響を与えているように思える。

表1・テレビの視聴時間×学年・性

(%)

	性別		学年		
	男子	女子	小4	小5	小6
1時間半以内	13.6	17.0	18.0	17.5	10.5
2時間台	23.0	26.2	22.4	27.6	24.5
3時間台	26.4	29.4	27.3	25.5	30.1
4時間以上	37.0	27.4	32.3	29.4	34.9

マンガ(小4)から歌番組(小6)へ

しかし、テレビ視聴の長さについての考察はのちに加えることとし、もう少し、テレビの見方について概観しておこう。

図1は、テレビ番組を6つのジャンルに分け、それぞれの番組が好きか嫌いかをたずねた結果である。好きなのは、歌番組とマンガ、次いでクイズとスポーツ、苦手なのは、教育テレビとニュースというプロフィールである。「ザ・ベストテン」を支えているのが小中学生であることを考えると、常識的ともいえる結果だが、「とても好き」の反応に注目して、学年別や性別の数値を求めると、下のようになる。

このように、マンガやクイズの好きな4年生が、学年が上がるにつれて、歌番組へ好みを

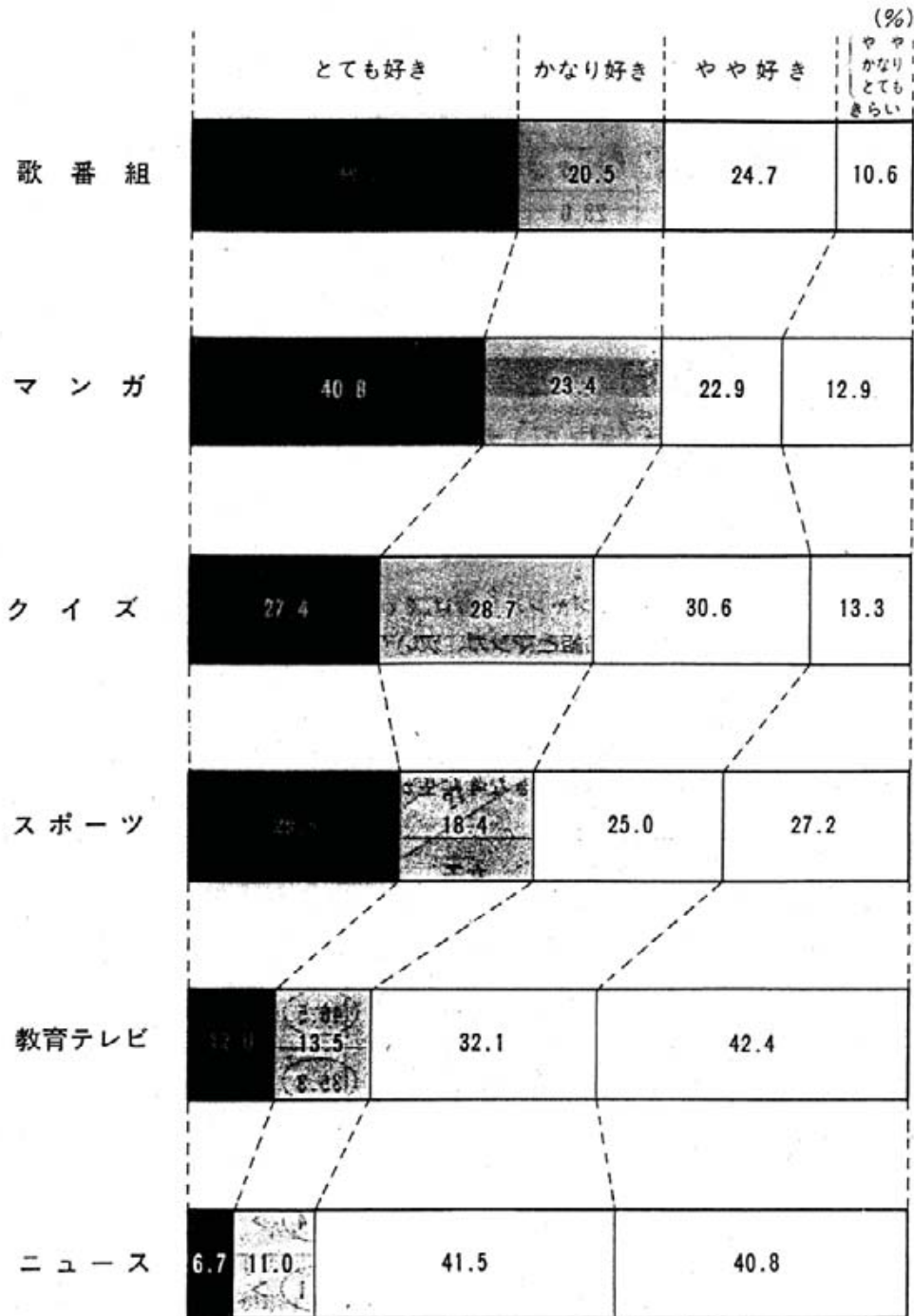
(%)

	男子	女子	小4	小5	小6
歌番組	38.6 <	50.0	40.2 <	43.6 <	48.7
マンガ	48.5 >	32.5	46.5 >	36.9	37.7
クイズ	29.1 >	25.6	35.3 >	23.8 >	22.1
スポーツ	42.7 >	15.7	36.0 >	24.8	26.4
教育テレビ	14.6 >	9.2	19.4 >	8.9 >	6.8
ニュース	8.3 >	4.9	9.1 >	5.9 >	4.8

1. テレビとどうつき合っているか

変えていくのがわかる。この調査では、対象が子どもであることを考えて、テレビのジャンルから、ホームドラマを除外してあるが、ドラマを加えてあれば、学年が上がるにつれて、視聴の割合が高くなったと考えられる。つまり、マンガやクイズの好きな、いかにも子どもらしい視聴態度から、歌やホームドラマなどを好むおとなのような視聴へと、視聴内容に変質が認められる。これは、子どもの精神面での成長をものがたるものであろう。

図1・好きなテレビ番組



おもしろいのは「全員集合」 ためになるのはニュース

しかし、ジャンル別の分析では、子どもたちの心情にいまひとつ迫れない感じがするので、「おもしろい番組」、「大好きな番組」などの形で、具体的な番組名をあげてもらったことにした。

まず、表2にじっくりと目を通してほしい。大づかみにすると、テレビの番組は「8時だヨ!全員集合」と「ニュース」に象徴されるように思える。つまり、「おもしろいけれど、見ているとお母さんが嫌な顔をする」のが、「8時だヨ!全員集合」で、逆に「お母さんがすすめるし、ためになると思うが好きになれない」のが「ニュース」となる。そして、「8時だヨ!全員集合」の流れをくむものに「漫才番組」や「ザ・ベストテン」があり、「ニュース」と同じ性格を持つものに「教育番組」があるという構図である。

表2・好きな番組、きらいな番組

(上位3番組のみ)

(%)

	1位	2位	3位
おもしろい番組	8時だヨ/全員集合 16.6	漫才番組 10.0	ドラえもん 8.9
大好きな番組	ザ・ベストテン 17.7	つりキチ三平 7.6	3年B組金八先生 5.4
気晴らしになる番組	漫才番組 13.0	ザ・ベストテン 7.6	ドラえもん 7.1
だいきらいな番組	ニュース 25.2	教育番組 8.7	8時だヨ/全員集合 8.1
ためになる番組	ニュース 39.3	教育番組 19.5	ウルトラアイ 10.8
勉強に役立つ番組	教育番組 54.3	ニュース 19.5	ウルトラアイ 7.6
お母さんがいやな顔をする番組	8時だヨ/全員集合 38.2	マンガ 13.0	プロレス 10.0
お母さんがすすめる番組	ニュース 33.9	教育番組 14.3	3年B組金八先生 7.7

1. テレビとどうつき合っているか

そして、表3に掲げたようにそうした番組観が学年や性別に関係なく、ほとんどすべての子どもたちに共通に認められるのは、表中の数値の示す通りである。図式的にとらえるなら、娯楽や気晴らし型のテレビ番組の代表に、「8時だヨ！全員集合」があり、その反対の極に、好きになれない学習型の代表として、「ニュース」が位置するということであろうか。

表3・好きな番組・きらいな番組×学年・性

(%)

		小4	小5	小6
おもしろい番組	男	8時だヨ/全員集合 21.6	8時だヨ/全員集合 16.3	8時だヨ/全員集合 13.0
	女	8時だヨ/全員集合 21.5	8時だヨ/全員集合 13.9	漫才番組 11.7
大好きな番組	男	つりキチ三平 13.8	つりキチ三平 16.8	ザ・ベストテン 14.0
	女	ザ・ベストテン 15.2	ザ・ベストテン 36.3	ザ・ベストテン 24.4
気晴らしになる番組	男	ドラえもん 13.5	漫才番組 20.7	漫才番組 10.6
	女	8時だヨ/全員集合 9.6	漫才番組 18.0	漫才番組 16.5
だいきらいな番組	男	ニュース 21.3	ニュース 28.9	ニュース 22.4
	女	ニュース 32.3	ニュース 32.1	ニュース 16.7
ためになる番組	男	ニュース 36.4	ニュース 45.1	ニュース 36.0
	女	ニュース 37.1	ニュース 38.8	ニュース 43.3
勉強に役立つ番組	男	教育番組 54.2	教育番組 41.0	教育番組 51.5
	女	教育番組 68.5	教育番組 53.9	教育番組 55.2
お母さんがいやな顔を する番組	男	8時だヨ/全員集合 39.9	8時だヨ/全員集合 27.6	8時だヨ/全員集合 36.4
	女	8時だヨ/全員集合 39.3	8時だヨ/全員集合 37.4	8時だヨ/全員集合 45.5
お母さんがすすめる 番組	男	ニュース 36.4	ニュース 29.5	ニュース 38.0
	女	ニュース 29.1	ニュース 36.6	ニュース 33.1

なお、子どもたちにテレビの持つ効用についてたずねると、図2のように、「たいくつを忘れられるだけでなく、気持ちがスカッとする」。それと同時に「テレビを通して、知識を得ることも可能だ」という評価が得られた。しかし、テレビを通して知識を獲得するのは、勉強をするのと同じ感じがして、自発的に視聴しにくい。そのため、つい気晴らしとして、テレビを見ることになりがちになるともいう。ここらあたりが、子どもたちの偽らざる気持ちであろう。

そこで、娯楽としてのテレビを象徴するものとして、子どもたちに好きなタレントの名前をあげてもらったことにした。

図2-テレビを見ている時の気持ち

	とても・かなりそう思う	すこしそう思う すこしそう思わない	とても・ かなり そう思わ ない
家の人と話し合いながら 見るのは楽しい	46.8	35.8	17.4
暇な時にテレビを見てい ると、たいくつを忘れる	44.1	37.5	18.4
テレビを通して新しい知 識をたくさん知ることが できる	37.6	52.3	10.1
悪者がたいじされると気 持ちがスカッとする	37.5	33.2	29.3
おもしろい番組を見てい るといやなことを忘れる	33.5	36.7	29.8
テレビは勉強になる	26.8	53.1	20.1

好きなのは、松田聖子と近藤真彦

表4に示したように、女子の間で近藤真彦と田原俊彦。そして男子に、ザ・ぼんちと近藤真彦に人気が集まり、女性タレントとしては、松田聖子を筆頭に、三原順子、河合奈保子らの名前が続く。以下、男性タレントの総合4位は西城秀樹6.6%、5位野村義男3.8%、水谷豊3.1%。また、女性タレントは、4位榎原郁恵7.6%、5位石野真子6.8%、6位岩崎良美5.0%の通りである。

これらのタレントの多くは、たのきんトリオが、「3年B組金八先生」(昭和55年)を舞台として登場したことが示すように、調査年の前年にデビューしたばかりの新人である。と

表4・好きなタレント

(%)

			1 位	2 位	3 位
男性 タ レ ン ト	4 年	男	近藤真彦 24.2	ザ・ぼんち 20.8	田原俊彦 12.7
		女	近藤真彦 51.2	田原俊彦 17.7	西城秀樹 6.5
	5 年	男	ザ・ぼんち 28.7	近藤真彦 21.7	西城秀樹 7.0
		女	近藤真彦 46.7	田原俊彦 31.2	西城秀樹 7.5
	6 年	男	ザ・ぼんち 16.8	近藤真彦 15.1	西城秀樹 7.6
		女	近藤真彦 43.4	田原俊彦 18.3	西城秀樹 6.4
	計	男	ザ・ぼんち 21.4	近藤真彦 20.7	田原俊彦 8.0
		女	近藤真彦 47.3	田原俊彦 21.8	西城秀樹 6.8
女性 タ レ ン ト	4 年	男	松田聖子 32.5	三原順子 13.4	河合奈保子 13.4
		女	三原順子 20.9	松田聖子 18.3	河合奈保子 11.4
	5 年	男	松田聖子 29.0	三原順子 13.0	河合奈保子 9.0
		女	松田聖子 25.8	三原順子 16.4	河合奈保子 11.7
	6 年	男	松田聖子 34.1	三原順子 13.4	河合奈保子 13.4
		女	松田聖子 20.9	河合奈保子 11.4	榎原郁恵 11.0
	計	男	松田聖子 32.3	三原順子 13.1	河合奈保子 11.6
		女	松田聖子 28.4	三原順子 16.4	河合奈保子 11.2

いっても、松田聖子に例をとれば、彼女の「青い珊瑚礁」は、昭和56年春の高校選抜野球の行進曲に採用されており、田原俊彦の「ハッとしてGood」や近藤真彦の「スニーカー・ぶるーす」なども、「ザ・ベストテン」である時期、トップを争ったヒット曲である。そうした意味では、おとなたちにもその名前をよく知られたタレントである。

こうしたデータを見ると、小学生たちの力が新人たちをデビューさせ、おとなたちの認知を迫ったという気がしないでもない。いずれにせよ、小学生たちのアイドルが、「ザ・ベストテン」を始めとする歌番組を独占している状況を考えると、テレビは所詮子どもものという感じが強まってくる。

なお、「好きなタレント」と同時に「嫌いなタレント」名を子どもたちにあげてもらったが、こちらにも、田原俊彦や松田聖子が登場していた。昭和55年度の新人賞を受賞した際、松田聖子は感動し、涙のでるふりをしたが、実際は涙ひとつ流していないとは、漫才の春やすこ・けいこ（好きなタレントで9位2.7%、嫌いなタレントで18位0.5%）のおはこだが、そうしたシーンが、聖子びいきと同時に、聖子嫌いを生みだしたのであろう。

表5・嫌いなタレント

(%)

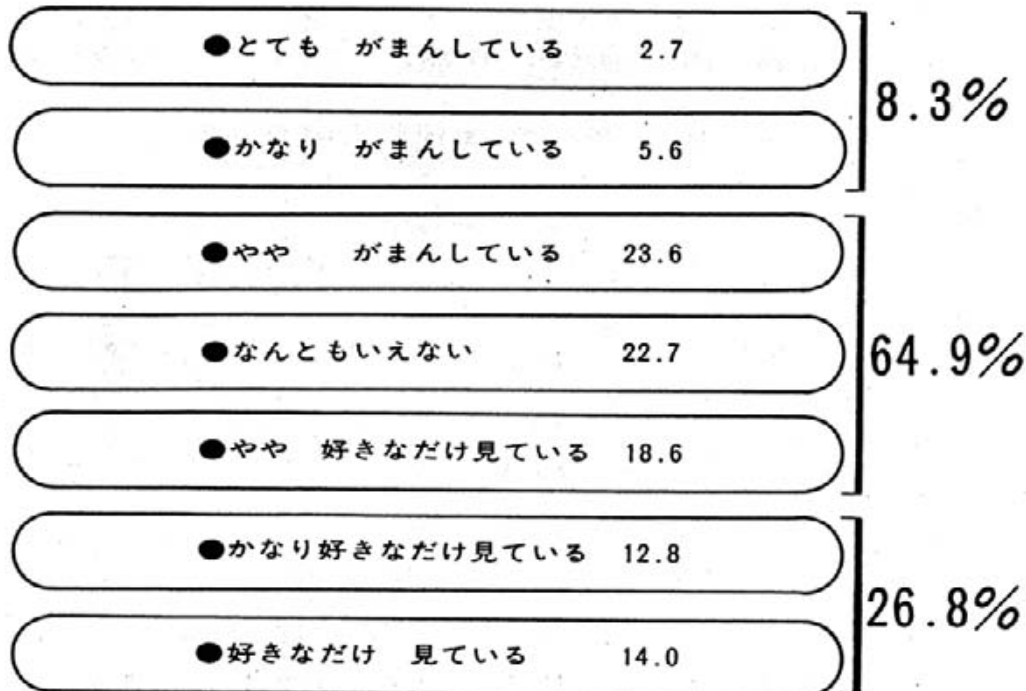
			1 位	2 位	3 位
男性 タ レ ン ト	4 年	男	田原俊彦 50.5	郷ひろみ 7.3	近藤真彦 6.8
		女	田原俊彦 38.6	沢田研二 14.7	郷ひろみ 10.5
	5 年	男	田原俊彦 70.3	近藤真彦 5.1	西城秀樹 3.1
		女	田原俊彦 34.1	沢田研二 6.7	五木ひろし 6.7
	6 年	男	田原俊彦 54.9	近藤真彦 15.2	沢田研二 8.2
		女	田原俊彦 42.2	沢田研二 12.1	志村けん 4.2
	計	男	田原俊彦 57.7	郷ひろみ 9.1	沢田研二 4.9
		女	田原俊彦 38.5	郷ひろみ 11.2	ゴダイゴ 10.4
女性 タ レ ン ト	4 年	男	松田聖子 50.8	研ナオコ 10.9	三原順子 7.7
		女	松田聖子 43.8	三原順子 4.4	小林幸子 4.0
	5 年	男	松田聖子 47.9	研ナオコ 16.3	三原順子 7.4
		女	松田聖子 57.8	研ナオコ 6.3	三原順子 4.9
	6 年	男	松田聖子 45.7	研ナオコ 10.9	五輪真弓 8.9
		女	松田聖子 61.7	三原順子 4.4	小林幸子 4.0
	計	男	松田聖子 48.2	研ナオコ 17.0	五輪真弓 5.9
		女	松田聖子 54.2	研ナオコ 9.2	五輪真弓 4.6

2. 視聴時間の長短を決める要因

見たいのをがまんしている長さは毎日30分

このように、子どもたちは娯楽、あるいは気晴らしとして、毎日3時間強、テレビを見つめる生活を送っている。問題はこの3時間強という長さを子どもたちがどう感じているかであろう。

「あなたは、ふだんテレビを見るのをがまんしていますか」の質問に対し、子どもたちは、



と答えている。少しがまんしていることはたしかだが、見たい番組はわりと見ているという反応である。そこで、「好きなだけテレビを見てよいとしたら」の形で希望する視聴の長さをたずねると同時に、母親や先生が「どの程度の長さを望んでいると思うか」の設問で、おとなたちから規制されている視聴の長さを質問することにした。

結果は図3に示した通りだが、平均値を算出すると、

●先生から望まれている長さ	1時間51分
●母親から望まれている長さ	2時間
●視聴の現状	3時間3分
●好きなだけ見てよいとしたら	3時間36分

のような結果が得られる。つまり、おとなたちから規制されているより1時間位テレビを長く見ているが、それでも見たいのを30分位がまんしている計算になる。換言するなら、

下の図のようにおとなたちから規制されている視聴の長さとは本人が望む長さとの間のほぼ 2:1の地点に、視聴の現状は位置している。そうした意味では子どもたちは、見たい番組を予想以上によく見ているような印象を受ける。

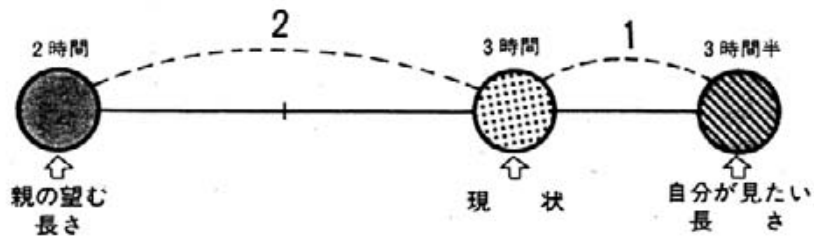
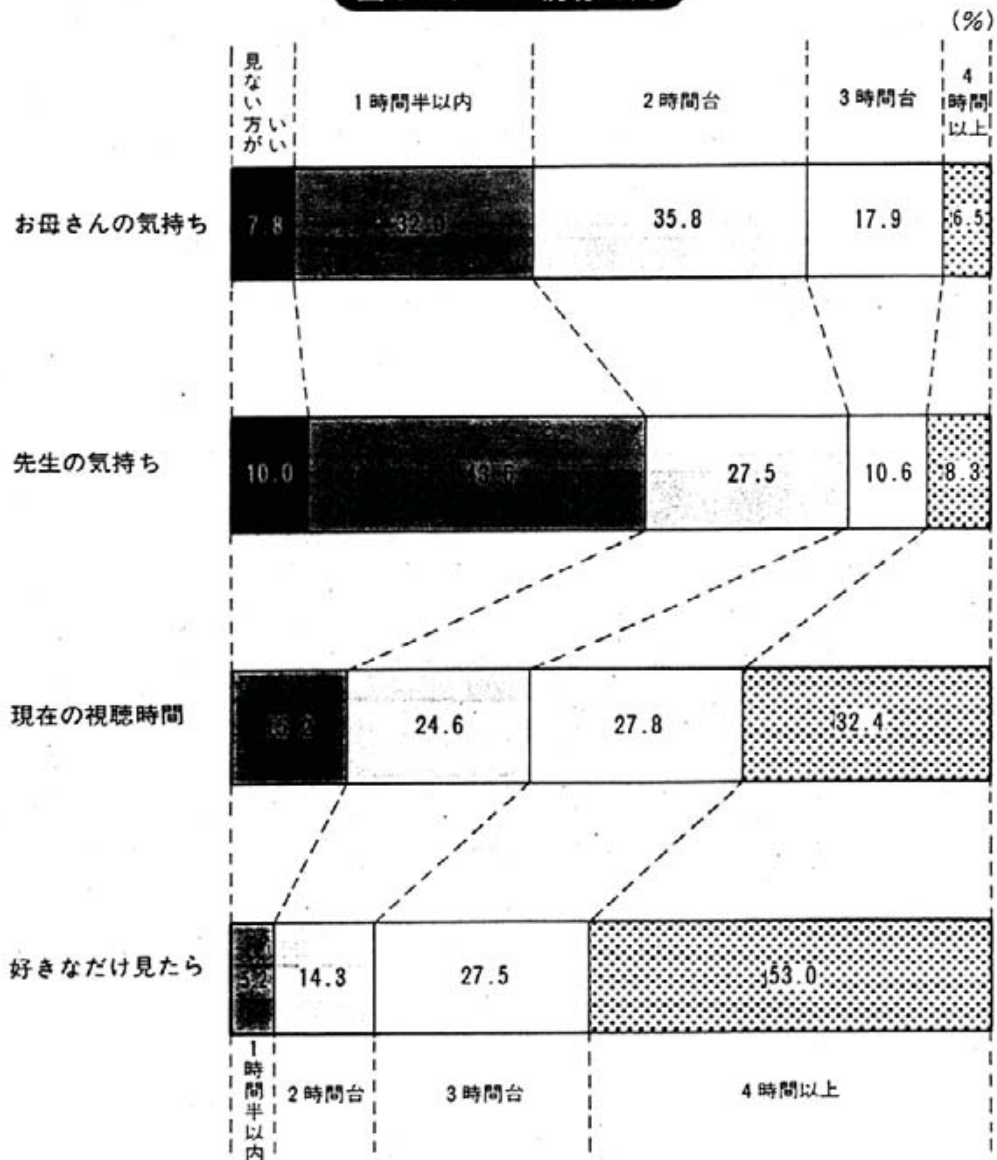


図3・テレビ視聴時間



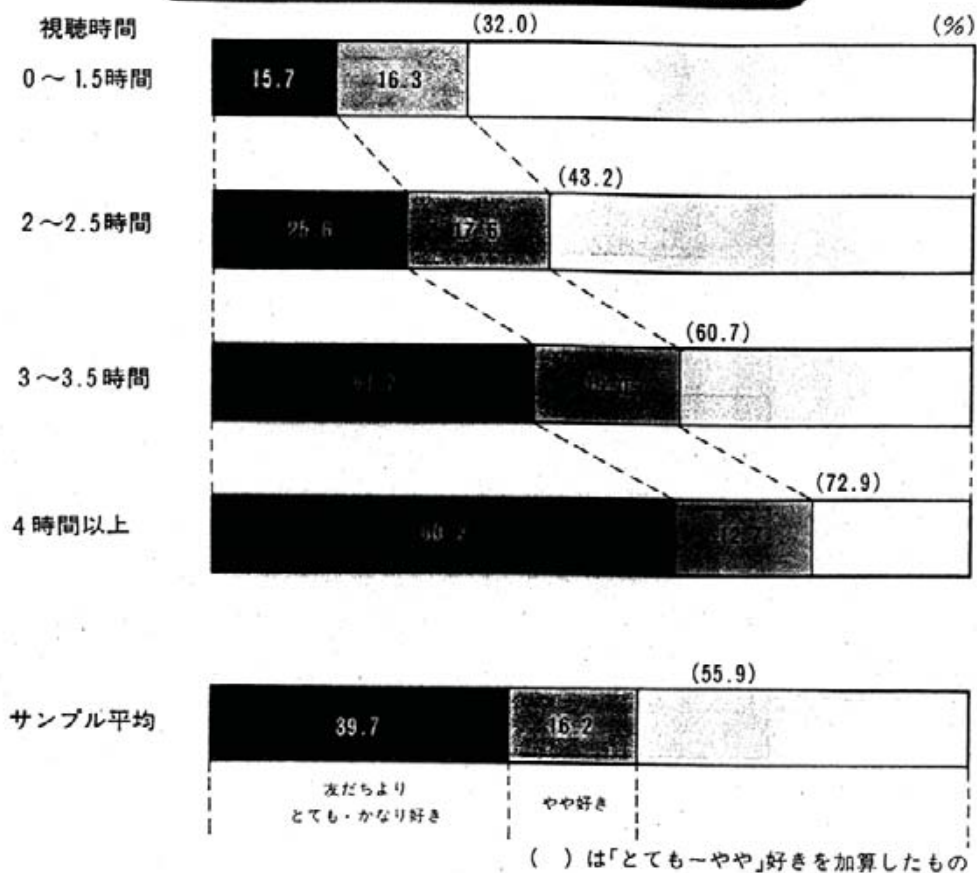
視聴時間の短い子の6割は、 見たいのをがまんしている

しかし、こうした考察はあくまで子どもたちを全体としてとらえた時の反応であって、個々の子どもたちに着目すると、すでに触れたように、毎日4時間以上テレビを見ている子がいる反面、テレビをほとんど見ていない子もみられる。そこで、そうした視聴時間の開きがどのような背景から生まれ、そして、どのような意味を持つのかを考えてみることにしたい。

まず、テレビの視聴時間の長さにより、子どもたちを①1時間半以内(15.2%)、②2時間～2時間半(24.6%)、③3時間～3時間半(27.8%)、④4時間以上(32.4%)の4つのグループに分けてみよう。

図4に示したように、視聴の時間が長くなるにつれて、当然のことながら、「自分は、友だちよりテレビ好き」と思う割合が高まってくる。例えば、4時間以上視聴している子どもの60.2%は、友だちより「とても」あるいは「かなり」テレビが好きだ。と自分自身を評価している。

図4・友だちよりテレビが好きか×視聴時間



また、図5によれば視聴時間の短い子どもたちほど、見たい番組をがまんしていると答える割合が多いのに対し、長い時間視聴している子どもは「好きなだけ見ている」と感じている。つまり、どの子どもも本当はテレビをもっと見たいのであり、視聴の長短は、見たいのをがまんできるかどうかにより生じているように考えられる。もっとも、図6から明らかのように、視聴が1時間半以内の子どもは2時間21分、2時間台の子は3時間6分と、あと30分か1時間、つまりあと1つか2つの番組を見たいと思っている。したがって、つきつめていうとあと1つの番組をがまんするかどうかの差が、視聴時間の開きをもたらしていると要約できよう。

図5・テレビをがまんしているか×視聴時間

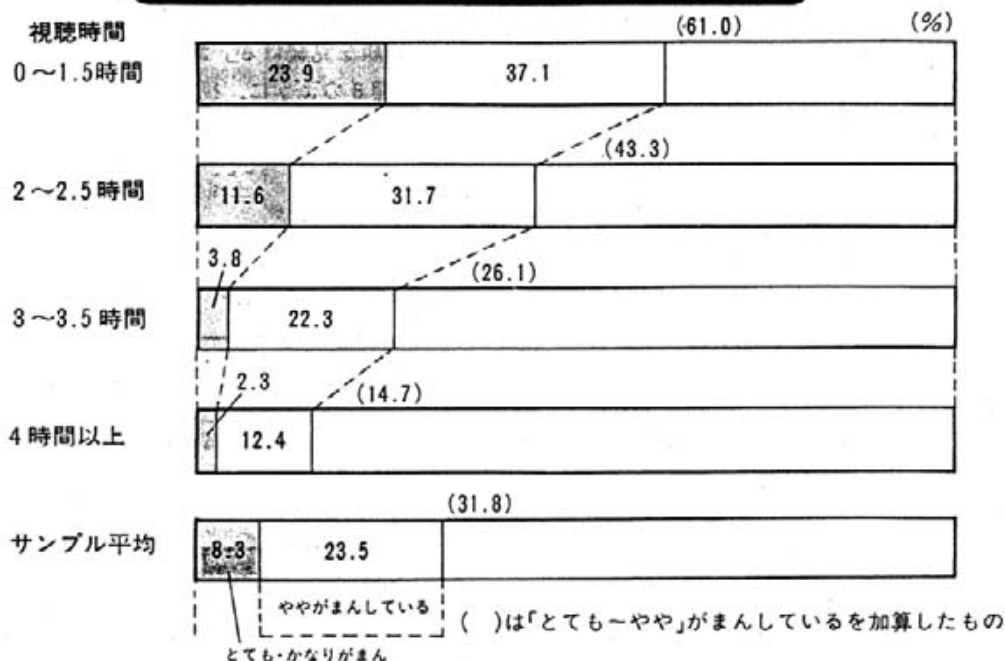
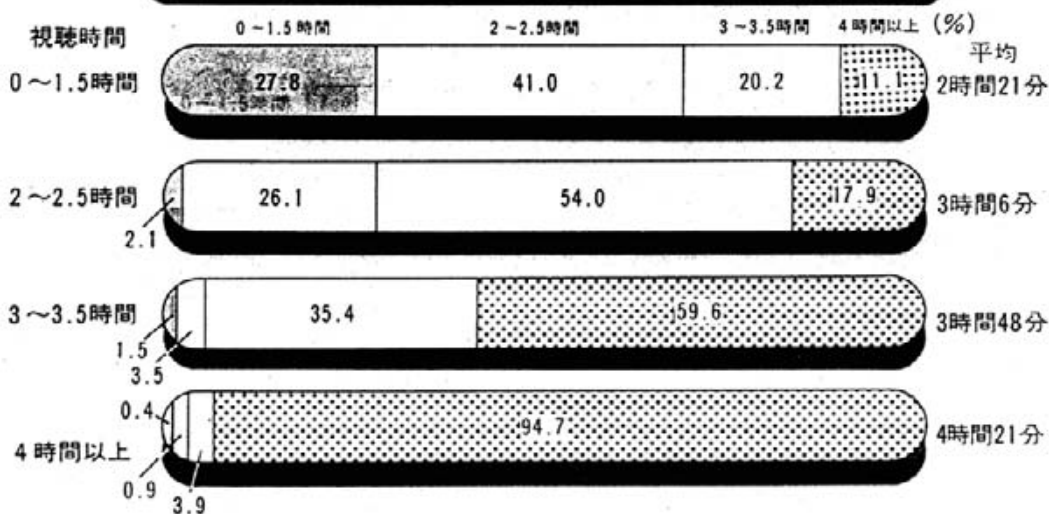


図6・好きなだけテレビを見てよいたら×視聴時間



ながら勉強をよくしているのは約2割

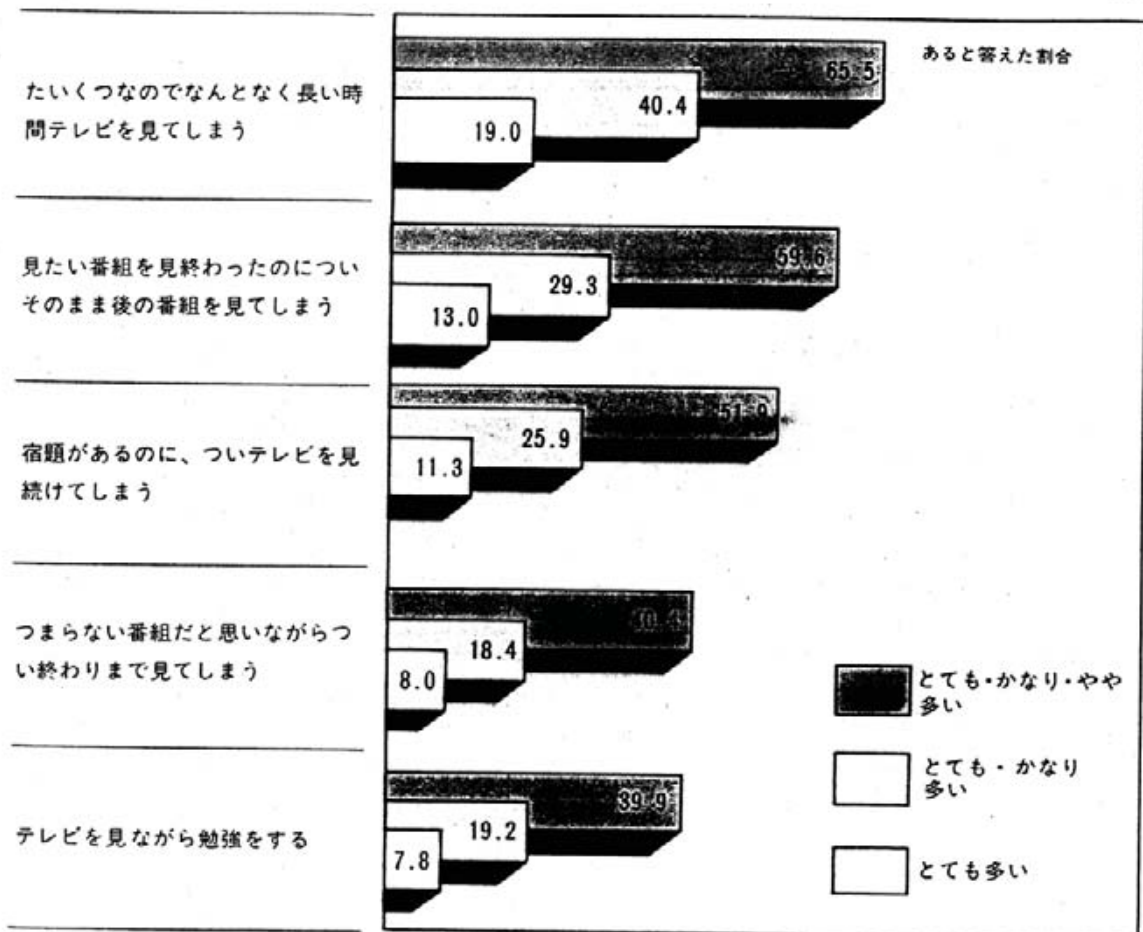
こうした視聴の気持ちをも、もう少し、細かく分析したのが図7、図8である。

われわれおとなでも、テレビをつい見てしまい、見終わったあとで時間をむだにしたと後悔することが多い。スイッチをひねるだけでとりあえず楽しい画像が映るから、なんとなくテレビを見続ける結果になりがちだからである。そうしたテレビの持つ魔力は、自制心に乏しい子どもの場合、より強く作用するのではないかと予想していた。

しかし、図7によると、子どもたちは予想より自制力を持っているようで——少なくとも、子どもたちはそう考えている——「つまらない番組を見続ける」あるいは、「ながら勉強をしている」子は、2割弱にすぎない。しかし、図8のように、視聴時間の長さに着目すると、「なんとなくテレビを見てしまう」割合は、1時間半以内11.4%、2時間台23.9%、3時間台40.4%、4時間以上65.8%と、視聴時間が長びくにつれて、「つい見てしまう」子の占める割合が増加してくる。

図7・テレビをつい見てしまうか

(%)

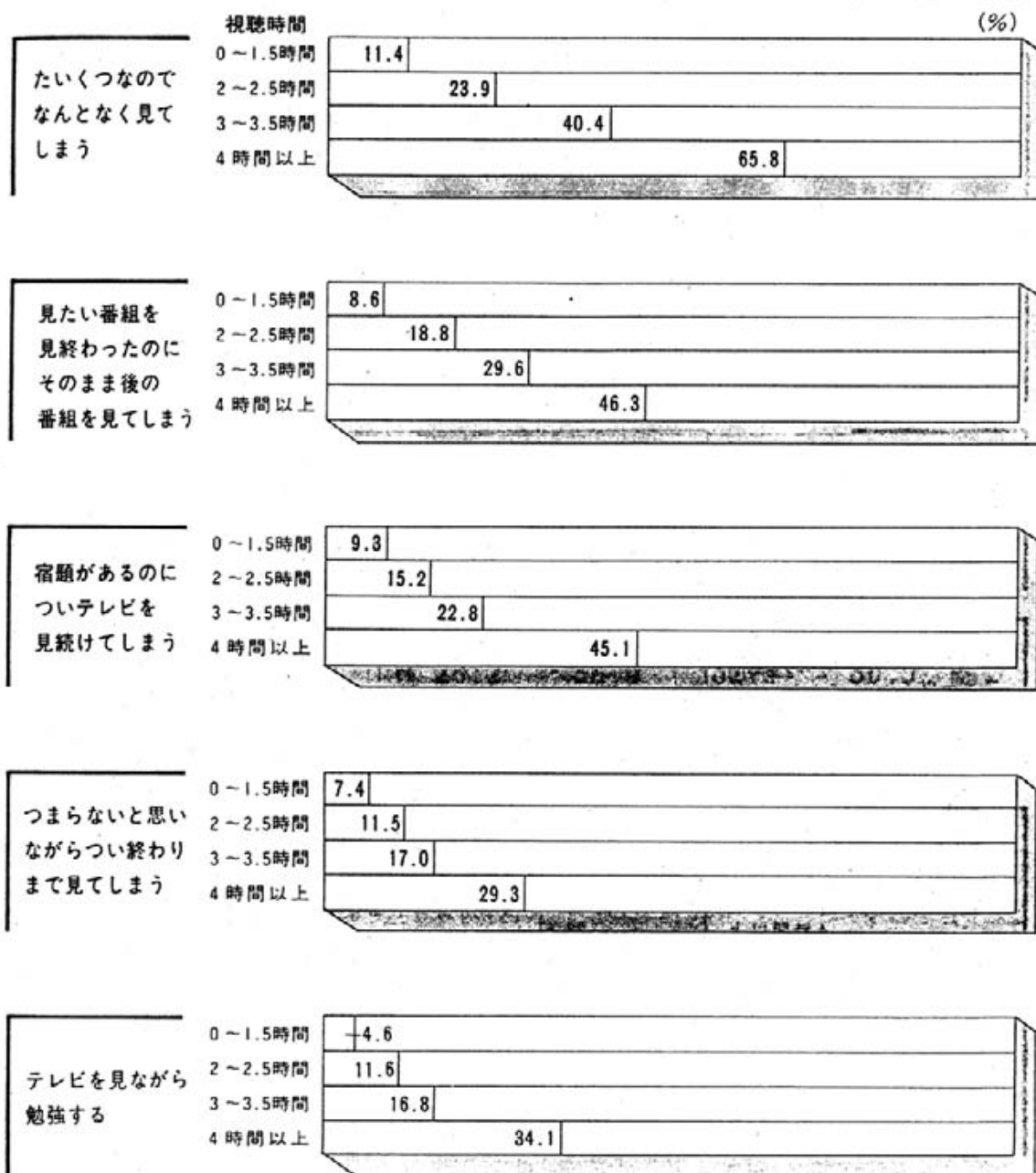


その他、「宿題があるのに、つい見続ける」「つまらない番組を終わりにまで見る」、「テレビを見ながら勉強をする」などについても視聴時間の長い子どもに「つい見続ける」傾向が強いことは、図中の結果が示すとおりである。

考えてみれば当然であろう。子どもたちが帰宅するのを、仮りに3時過ぎ、そして、就寝を10時と考えるなら、在宅時間は6時間半にすぎない。その中から夕食や入浴、宿題などの時間を除くと、余暇時間は5時間を割ろう。したがって、4時間以上テレビを見続けている子は、ほとんどの時間をテレビとともに過ごしていることになる。生活のリズムを欠いた、まさにテレビにつかりきった生活である。

図8 、「つい見てしまっか」×視聴時間

とても・かなり多いと答えた割合



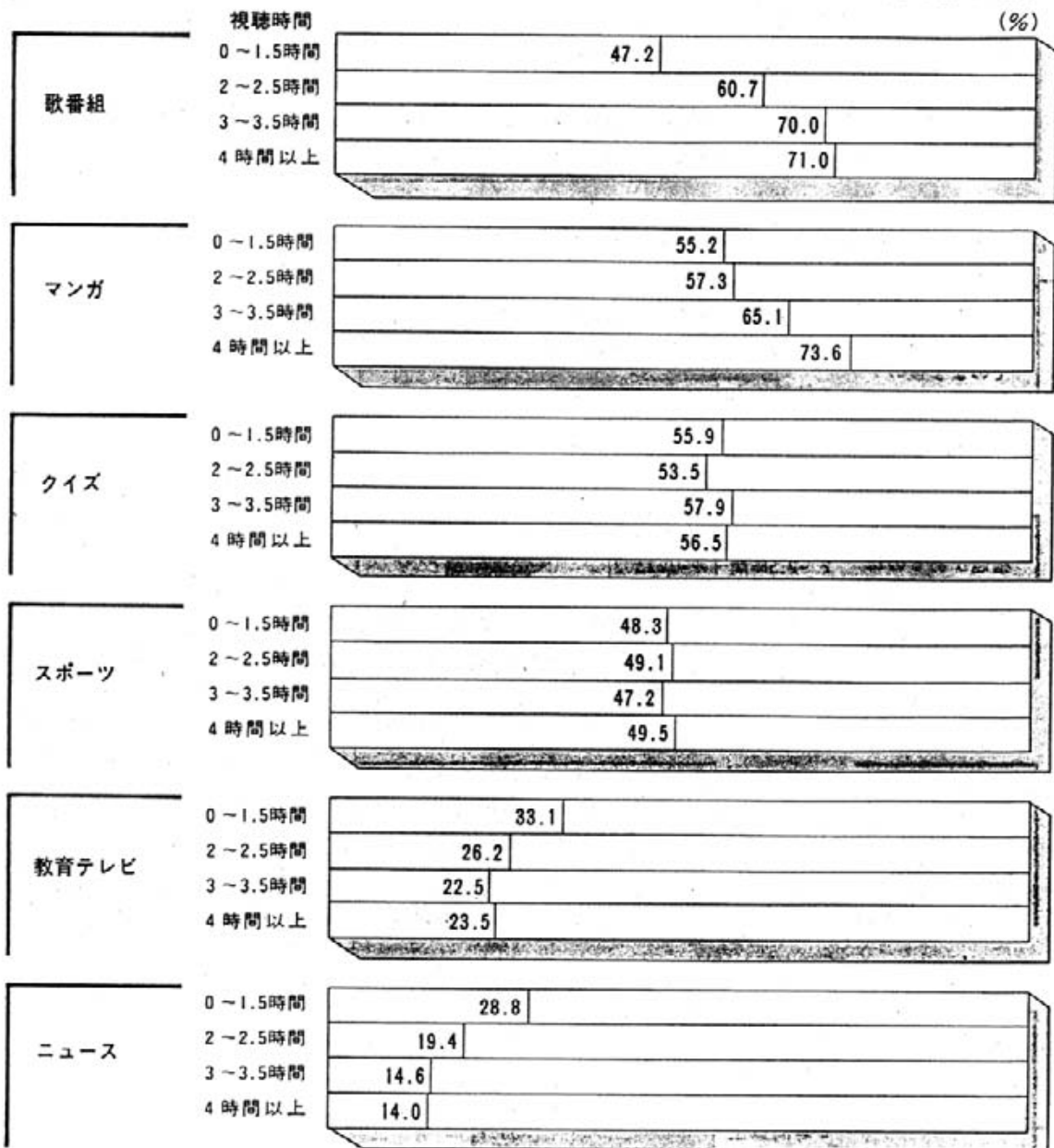
テレビを見ていない子ども、松田聖子のファン

こうした傾向をテレビ番組のジャンル別に着目して分析したのが、図9である。視聴時間の長い子どもほど、ニュースを避け、マンガや歌番組を見続けている割合が高い。

もっとも、表6が示すように視聴時間の短い子ども、長い子どもと同じように近藤真彦

図9 視聴時間×好きな番組

とても・かなり好きと答えた割合



と松田聖子のファンで、「8時だヨ！全員集合」をおもしろいと思い、「ザ・ベストテン」が好きで、漫才番組は気晴らしになると感じている。そうした意味では、視聴時間の短い子どもといつてもテレビに関心を持たない子なのではなく、長い時間テレビを見ている子と同じような気持ちを抱いている。ただ、見たい気持ちをがまんしているかどうかが視聴時間の長短となってあらわれている。

表6 - タレントや番組への評価 × 視聴時間

(%)

	1時間半以内	2時間台	3時間台	4時間以上
好きな男性タレント1位	近藤真彦 35.6	近藤真彦 36.0	近藤真彦 38.4	近藤真彦 31.3
好きな女性タレント1位	松田聖子 29.5	松田聖子 30.4	松田聖子 29.3	松田聖子 30.4
おもしろい番組	8時だヨ/ 23.4	8時だヨ/ 17.2	8時だヨ/ 14.5	8時だヨ/ 16.6
大好きな番組	ザ・ベストテン 13.4	ザ・ベストテン 23.8	ザ・ベストテン 19.0	ザ・ベストテン 13.7
気晴らしになる番組	漫才 12.9	漫才 13.3	漫才 16.5	漫才 89.0
ためになると思う番組	ニュース 40.0	ニュース 38.8	ニュース 43.4	ニュース 35.1
お母さんが いやな顔をする番組	8時だヨ/ 40.2	8時だヨ/ 45.8	8時だヨ/ 38.3	8時だヨ/ 28.8
お母さんが 見るのをすすめる番組	ニュース 28.2	ニュース 38.0	ニュース 32.9	ニュース 36.5

したがって、子どもたちがテレビ視聴をどの程度がまんしているかが、視聴時間の長さに関連してくるが、図10の「テレビの見方」が示すように、「好きなだけ見ている子」と「なんらかの視聴制限をしている子」の割合は、ほぼ半々である。しかし、ふだん好きなだけテレビを見ている子どもも、そうした見方がテレビとの理想的なつき合い方とは思っていないようで、図11から明らかなように番組を選び、時間や本数を決めてテレビを見るのが望ましいという答えが8割を上回っている。

番組を見るのを制限しなければいけないと思いつつ、つい見すぎてしまうのがテレビ視聴の実態なのであろう。図12の視聴時間とテレビの見方とのクロス結果も、そうした傾向を鮮やかに示している。たとえば視聴時間の長い子の79.2%は「好きなだけテレビを見ている」のに対し、視聴時間の短い子は、「長さを制約している」46.2%など、なんらかの方法で視聴をコントロールしているのが目につく。

2. 視聴時間の長短を決める要因

図10・テレビの見方 (%)

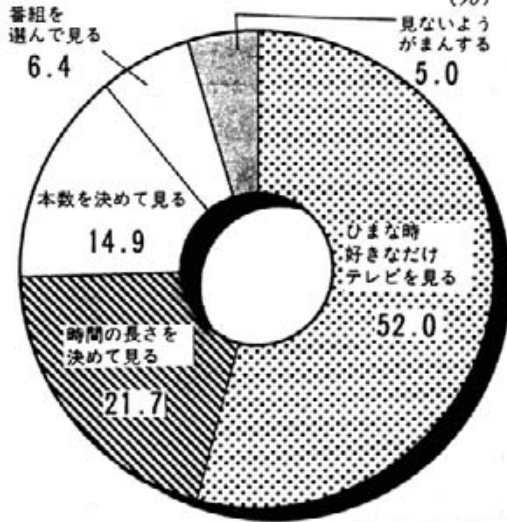


図11・理想のテレビの見方 (%)

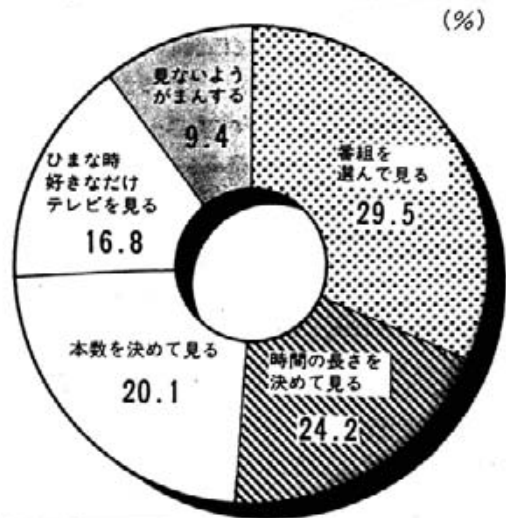


図12・視聴時間×テレビの見方 (%)

理由	視聴時間	割合 (%)
ひまな時好きなだけ見る	0～1.5時間	12.6
	2～2.5時間	34.9
	3～3.5時間	59.6
	4時間以上	79.2
時間の長さを決めて見る	0～1.5時間	46.2
	2～2.5時間	30.2
	3～3.5時間	16.0
	4時間以上	7.4
本数を決めて見る	0～1.5時間	18.5
	2～2.5時間	20.8
	3～3.5時間	15.5
	4時間以上	8.2
ためになりそうな番組を選んで見る	0～1.5時間	11.1
	2～2.5時間	7.4
	3～3.5時間	5.5
	4時間以上	3.4
なるべく見ないようがまんする	0～1.5時間	11.7
	2～2.5時間	6.8
	3～3.5時間	3.3
	4時間以上	1.8

3. 家庭のテレビ環境

さて、ここで少し視点を変えて、これまで考察を行ってきた子どものテレビの視聴時間の長さを決める要因を、子どものおかれている環境とも言うべき家庭との関連において探っていくことにしよう。

テレビは平均2.1台

まず、各家庭のテレビの所有台数を表わしたのが図13である。2台という家庭が最も多く45%。次いで1台、3台の順だが、4台以上という家庭も8%ある。平均所有台数は2.1台となるが、この調査サンプルの平均家族数は4.6人であるので、ほぼ家族2人に1台という割合でテレビを所有していることになる。

では、この2人に1台のテレビのうち、子ども専用テレビとして扱われている割合はどうか。図14がその結果であるが、子どもたちのうちの32%、約3分の1が自分専用、あるいはきょうだい共用でテレビを持っていることになる。

図13・テレビの台数平均2.1台

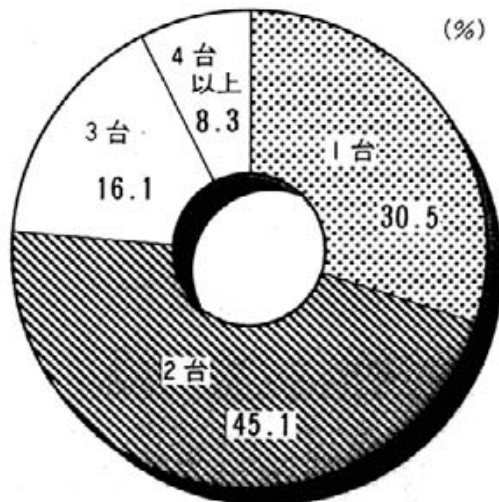
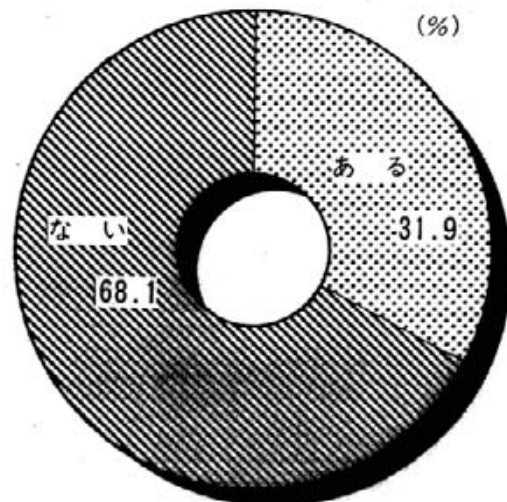


図14・子ども用テレビの有無



これらの数値を見ると、かつてテレビを論じる時、必ずと言ってよい程問題にされてきたチャンネル権の問題は、今やもう無用となりつつあることがわかる。親と別の番組を見たければ「もう一つのテレビ」で見ればよい。親がニュースを見ている時間にも、子どもは好きな歌番組やマンガ番組を見ることができるのである。かつてのテレビは、子どもが見せてもらうことがあっても、所詮親たちが持ち主であった。しかし、今では子どもがテレビを持つ時代を迎えている。

しかし、次の図15と図16を見ると、「テレビはひとりで見るとよりみんなで見た方が楽しいと思うし、家ではテレビを黙って見ているよりおしゃべりしながら見ている方が多い」と答えている子が多い。このようにパーソナルテレビの時代が訪れたとはいえ、テレビが家族団楽の潤滑油として機能している事実も否定しがたい。

図15・ひとりで見るのとみんなで見るのはどちらが楽しいと思うか

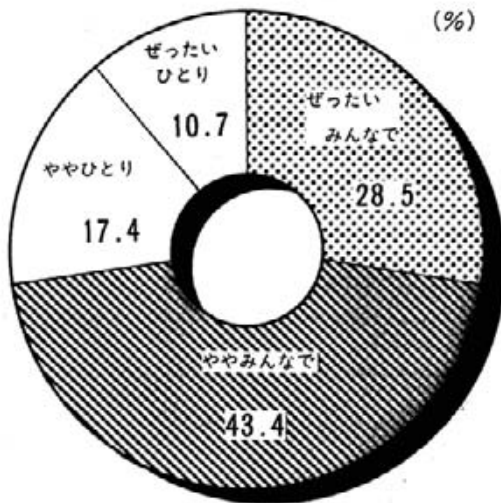


図16・話しながらテレビを見るか



なお、パーソナルテレビを持つ子どもの割合を学年別に見ると、図17のようになる。学年が上がると子ども部屋を持つ子の割合が増えるためか、テレビを持つ子は6年生で38.1%に達する。

図17・学年×子ども用テレビの有無

	ある (%)	ない (%)
4年生	27.4	72.6
5年生	30.0	70.0
6年生	38.1	61.9

このようなテレビのパーソナル化や子ども専用テレビの増加は、子どもの視聴時間とどう関連しているのだろうか。

結果は図18、図19の示す通りで視聴時間が1時間半以内の子どもの場合、家庭にテレビが1台しかない割合が43.9%。そして子ども用のテレビを持っていない子が73.1%に達する。しかし4時間以上テレビを見ている子は、39.7%が子ども用のテレビを持ち、家庭の中に3台以上のテレビがある家庭が28.2%を占める。

子ども部屋があり、そして家庭にもなん台かのテレビを置けるようになった。そうした家庭の姿は20年ほど前なら、アメリカ映画の中でしか存在しなかった光景である。昭和20年代の終わり、テレビの本放送が始まった頃、17インチの受像機は1台25万円だったという。ホワイトカラーの月給が3万円前後の時代であるから、月給のおおよそ8倍、現代の価格に換算すると国産の自動車1台分よりやや高価な商品である。そうした高嶺の花ともいべきテレビは、物価と反比例する形で昭和30年に18万円、35年に10万と値下がりを経て、今や子どもたちも持てる生活の用具となった。しかしその結果テレビを友として暮らす子

図18 - 視聴時間×テレビの台数

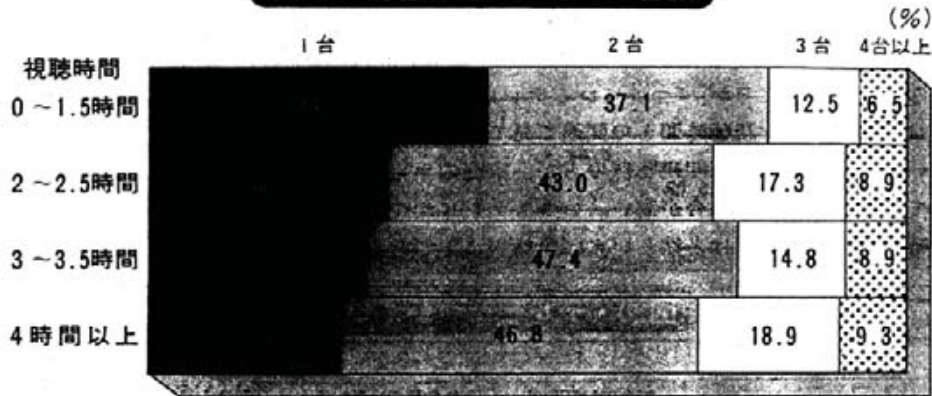


図19 - 視聴時間×子ども用テレビの有無

視聴時間	子ども用テレビの有無 (%)	
	ある	ない
0～1.5時間	26.9	73.1
2～2.5時間	28.4	71.6
3～3.5時間	29.8	70.2
4時間以上	39.7	60.3

もの増加を招いたのだとしたら、豊かさは子どもを不幸にするとさえなくもない。

テレビがつけっ放しの家庭の子は視聴時間が長い

次に、「夕食を食べる時」など子どもの生活場面の中から5つの場面をとって、そのような時間に「あなたの家ではテレビがついていることが多いですか」とたずねた結果を図20に掲げた。「いつもついている」「かなりついている」と答えた子どものパーセントは、

「夕食を食べる時」……………58.5%(78.6%)

「お風呂に入る頃」……………53.8%(81.5%)

「寝る時」……………44.5%(73.6%)

「朝起きた時」……………39.8%(57.5%)

「学校から帰った時」……………15.8%(42.9%)

()は「ついていることもある」を含めた割合

となっており、子どもたちが朝起きてから夜寝るまでかなり多くの家庭ではテレビがつけ

つ放しになっている様子が見える。

この結果は、子どもたちが見たい番組を積極的に見ようと思って自分でスイッチを入れ、チャンネルを回して見ているわけではなく、とにかく四六時中テレビがついている、換言するなら、子どもたちが、「ついているテレビ」を見ることが多いことを暗示している。

では、この結果を視聴時間との関連で見るとしよう。図21に掲げた通り5つの場面のいずれの場合も長時間視聴群の方が、家庭のテレビが「いつもついている」「かなりついている」と答える割合が高い。いつもテレビがついているという環境の中にいる子が、視聴時間が長くなるのは当然といえば当然のことであるかもしれない。

図20・テレビがついている時

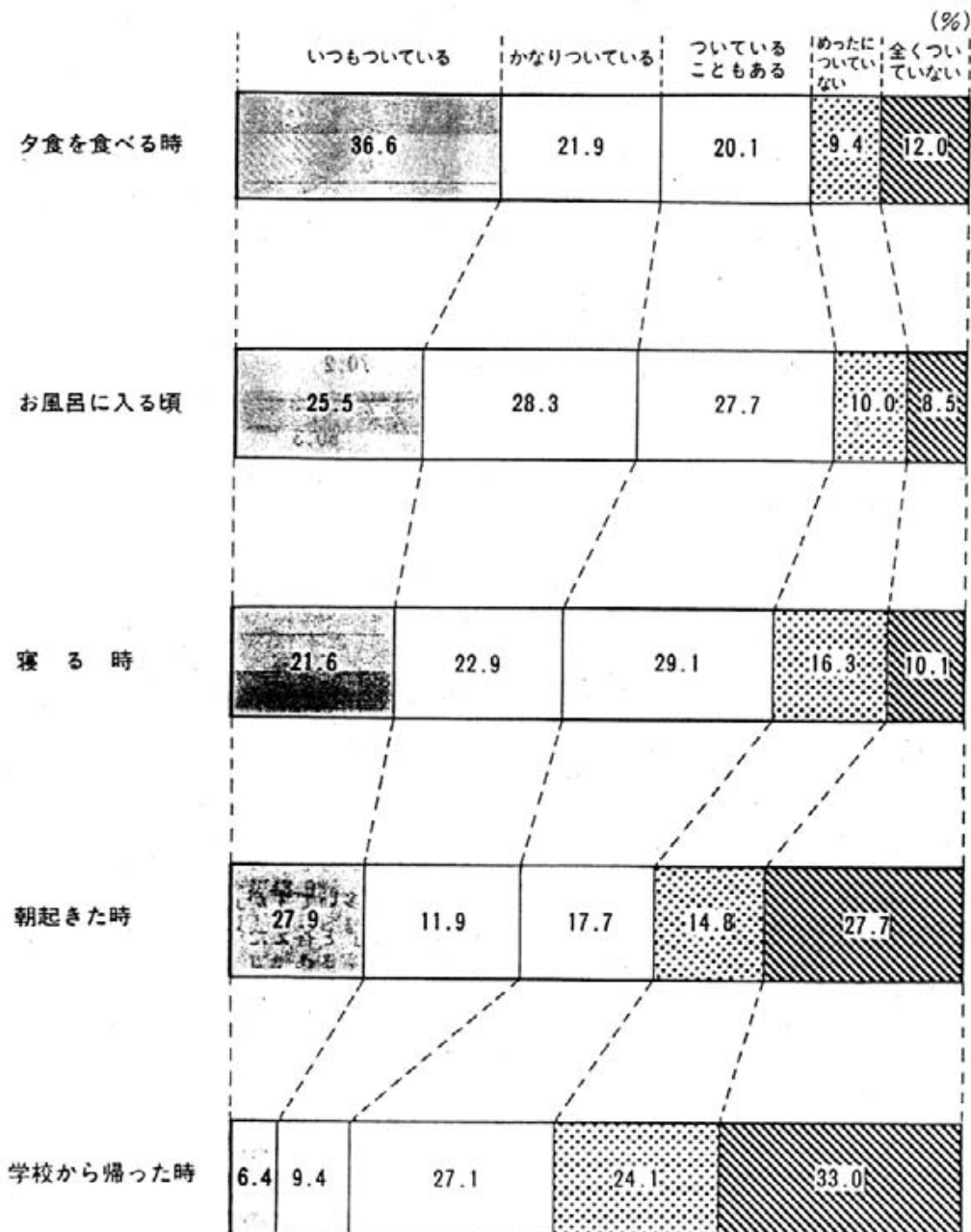
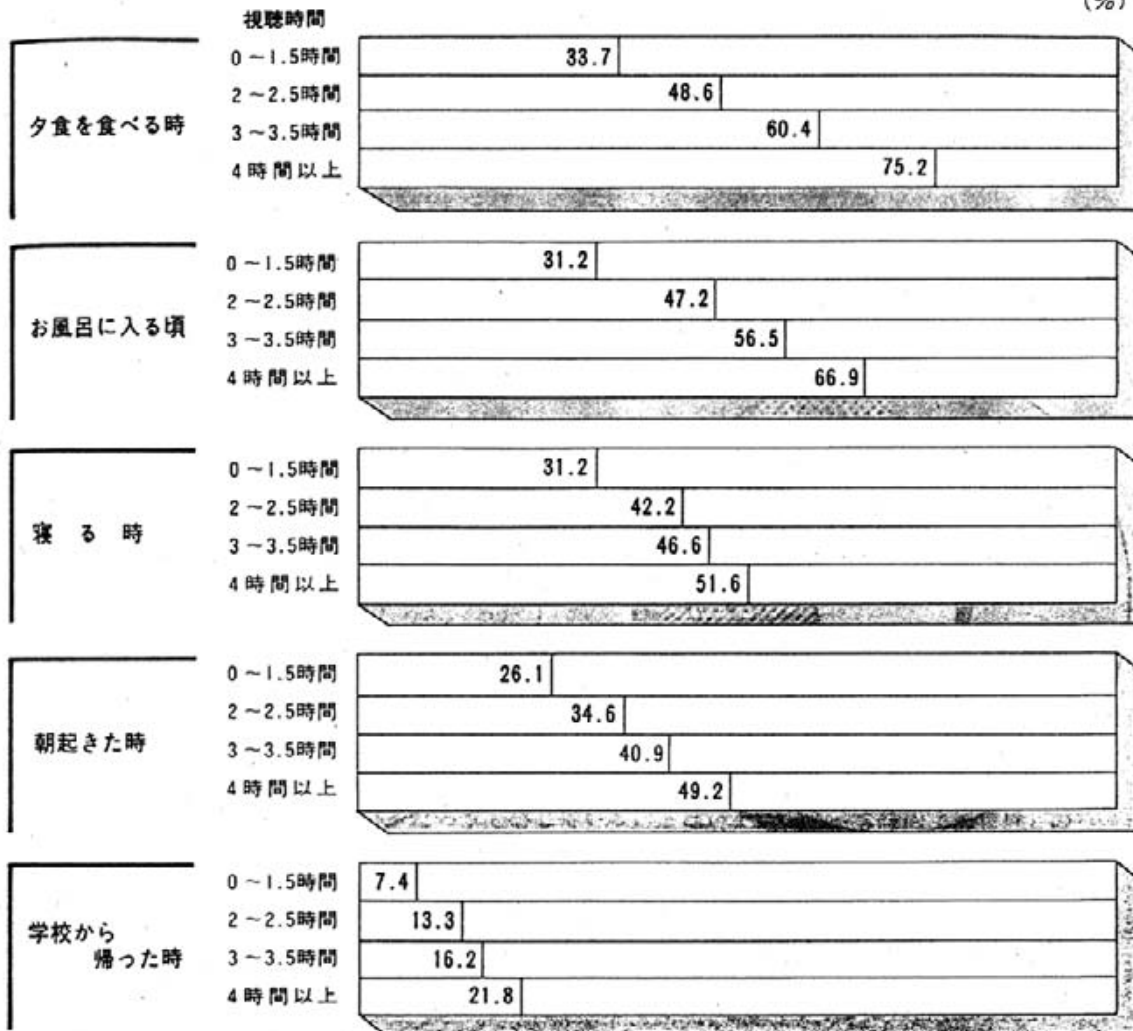


図21 - 視聴時間×テレビがついている時

いつも・かなりついていると答えた割合 (%)



お父さんお母さんもテレビ好き

このようにみえてくると、子どものテレビ視聴に、家庭のテレビ環境、特に両親の視聴態度が大きな影響を持つように考えられる。そこで、両親とテレビとの関係を表わすデータとして、「お父さん、お母さんはテレビ好きですか」とたずねた結果を見ていくことにしよう。図22がその結果であるが、「とても好き」から「とてもきらい」まで7段階で反応させると、「ふつうぐらい」というのが父母ともに一番多いが、「きらい」と答えた率は「とても・かなり・やや」を合わせても、父親については7%、母親については12%、といずれも低い数値となっている。全体に、お母さんよりお父さんの方がテレビ好きと思われているようであるが、子どもたちから見た両親はどち

3. 家庭のテレビ環境

らもテレビ好きの人というイメージを持たれている。

テレビ好きの両親と子どもの視聴時間との関係を追ってみたのが次の図23である。ここでもやはり、長時間視聴群の両親の方が、テレビを「とても好き・かなり好き」な親と評価されているようである。換言するなら、テレビ好きの子は、テレビ好きの親から生まれてくると言えなくもない。

図22 - お父さんお母さんはテレビ好きか

(%)

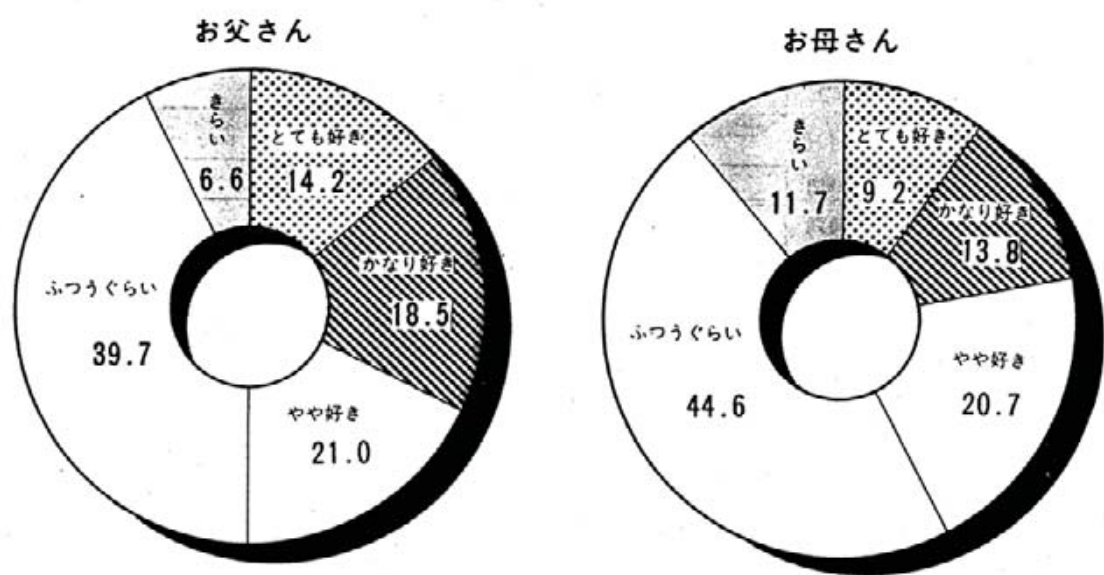


図23 - 視聴時間×親がテレビ好きか

とても・かなり好きと答えた割合 (%)

親	視聴時間	割合 (%)
お父さんはテレビ好きか	0～1.5時間	24.9
	2～2.5時間	26.8
	3～3.5時間	33.0
	4時間以上	40.2
お母さんはテレビ好きか	0～1.5時間	11.4
	2～2.5時間	17.8
	3～3.5時間	20.6
	4時間以上	33.6

母親のコントロールが視聴の長さに反映される

それでは、こうしたテレビ好きの親たち、とりわけ母親たちのテレビ視聴時間に対する期待を、子どもたちはどう受けとめているのだろうか。

図24に示したのは、「あなたのお母さんはふだんの日、あなたがテレビを見る長さがどれくらいがよいと思っているでしょうか」と、子どもたちにたずねた結果である。

図24 母親はどれ位の視聴時間がよいと思っていると思うか

0～1.5時間	2～2.5時間	3～3.5時間	好きなだけ見てよい
39.8	35.8	17.9	6.5

(%)

「0～1時間半位」を期待されていると思っている子が39.8%、「2～2時間半位」を期待されていると思っている子が35.8%であるが、「3時間以上、好きなだけ見てよい」と母親が思っていると答えている子が4分の1存在するのは理解に苦しむ。こうした結果を現在の子どものテレビ視聴時間と対比させてみると、期待されているであろう時間よりも実際の方が多く見ているのは、すでに触れた通りである。

この結果を子どもの視聴時間とのクロスでもう少し詳しく見ていくことにしよう。

図25がその結果であるが、視聴時間の短い子は母親も短時間視聴を自分に期待しているだろうと答えている。それに反し、視聴時間の長い子は、母親も自分の視聴時間はある程度長くてよいと思っているだろうと感じている。とはいえ、「2～2時間半視聴群」の53.4%は「0～1時間半位がよいと（母親は）思っているだろう」と答えており、いわば期待に届いていないと感じている子どもが半数をこえる。

親たちの期待に届いていないと感じているであろう子どもの割合は視聴時間が長くなるにつれ当然ながら増えており、4時間以上視聴群では、85.1%の子どもたちは、多かれ少なかれ期待に届いていないと思っていると見ることもできる。なお参考までに、担任の先生からの期待をどう受けとめているかを図26に掲げておいた。

では、テレビ視聴についての母親からの期待という消極的コントロールとは別に、積極的な視聴コントロールがどう行われているかを聞くために、「ルパン3世のようなマンガ」など5つのジャンルを挙げ、そのような番組を見ていたら、お母さんは「テレビを見るのをよしなさい」と言うかどうかをたずねてみた。結果は図27のようになる。「きつと言う」「たぶん言う」「半分半分」を合わせると、

「おとなのホームドラマ」	64.8%
「ルパン3世のようなマンガ」	50.2%
「8時だよ！全員集合のような番組」	44.0%
「ザ・ベストテンのような歌番組」	38.1%
「クイズダービーのようなクイズ番組」	19.0%

3. 家庭のテレビ環境

となっており、当然ながらジャンルによって、「見るのをよしなさい」という割合にかなり違いがみられる。母親のコントロールの仕方は決してのべつテレビを見るなど言っているのではなく、母親なりの教育的配慮のもとに禁止令が出されている。

この結果を子どもの視聴時間別に見たのが図28であるが、ここでも視聴時間の短い群の母親の方が長い群よりコントロールをしているという結果が得られている。

以上、この章では子どものテレビ視聴を家庭との関連の中でとらえてきたが、子どもたちのテレビ視聴が、家庭のテレビ環境、特に母親の視聴態度に影響されることが多いことが明らかとなった。家庭にテレビが1台しかなく、そのテレビもついていないことが多い環境だと、テレビと接する機会が少ないから、当然のことながらテレビを見ない子が育ってくる。それに対し、なん台ものテレビがつけっ放しの家庭で暮らす子どもは、自分からスイッチをひねらなくとも長い時間テレビを見続けることになりやすい。

そうした意味では、テレビを見続けている子どもは、本人自身の忍耐力の欠除もさることながら、テレビがつけっ放しの家庭環境の被害者とも言えよう。とすると親の視聴態度が加害者ということにもなる。

図25・母親の望む視聴時間×実際の視聴時間

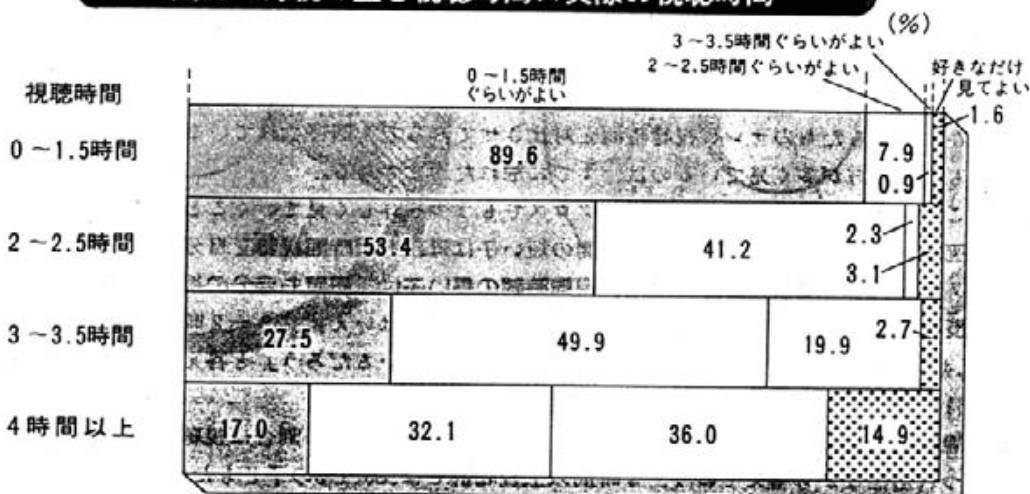


図26・担任の望む視聴時間×実際の視聴時間

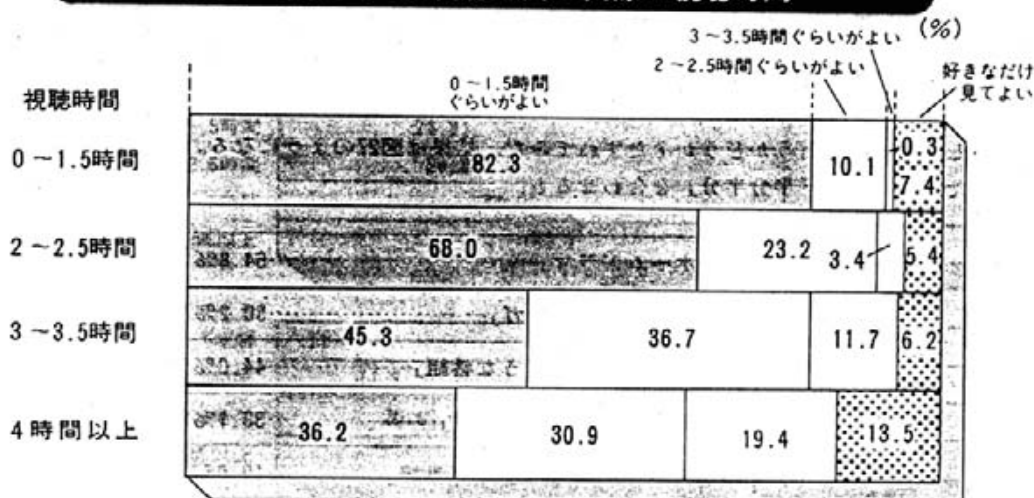


図27・テレビを見るのをよしなさいと言うか×番組のジャンル (%)

	きつと言う	たぶん言う	はんぶんはんぶん	たぶん言わない	絶対言わない
おとなのホームドラマ	18.9	20.5	25.4	21.4	13.8
マンガ	7.1	12.5	30.6	32.0	17.8
8時だヨ!全員集合	16.0	10.8	17.2	22.0	34.0
歌番組	7.1	11.6	19.4	29.6	32.3
クイズ番組	3.8	13.3	31.2	49.8	1.9

図28・視聴時間×母親がテレビを見るのをよしなさいと言うか

きつ・たぶん言うと答えた割合

番組ジャンル	視聴時間	割合 (%)
おとなのホームドラマ	0~1.5時間	54.3
	2~2.5時間	46.5
	3~3.5時間	36.2
	4~4.5時間	28.0
マンガ	0~1.5時間	29.1
	2~2.5時間	20.5
	3~3.5時間	18.3
	4~4.5時間	14.9
8時だヨ!全員集合	0~1.5時間	42.1
	2~2.5時間	29.9
	3~3.5時間	25.6
	4~4.5時間	18.4
歌番組	0~1.5時間	28.3
	2~2.5時間	20.8
	3~3.5時間	17.9
	4~4.5時間	13.7
クイズ番組	0~1.5時間	10.9
	2~2.5時間	5.3
	3~3.5時間	4.5
	4~4.5時間	5.4